

「原爆文学」探査②

千田夏光 『終焉の姉妹』

坂口博

千田夏光は、被爆の瞬間を次のように描写する。

午前十一時二分――。

「やっぱり、お父ちゃんに会ってから行くことにするわ」キヌ子は言った。いや、そうサトに告げようと、台所に、足を踏み入れたときだった。

チカツ、なにかが光った。反射的に、なんだろ、窓の外へ首をひねった。ひねったのと同時に、ポーン、頬のウブ毛がゆれた。鈍い音を聞いた。音の中で、フアーツ、体が浮いた。宙に浮いた。眼の前が暗くなった。はっ、と気がつくときサトにしがみついていた。サトもキヌ子にしがみついていた。

台所のまんなかにいたはずだったのが、しがみつき合ったまま、壁に押しつけられていた。

「お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」

玄関のほうから満州夫の、けたたましい声がした。

「どげんしたと？」

「宗、宗、宗男兄ちゃんが……！」

とび出すと、玄関の踏み石の上に両膝をかかえるようにして宗男がころがっていた。二つの鼻孔から、徳利から酒をそそぐよう

に、血が、トクトクと流れ出つづけていた。どこか、遠くで、誰かが、大声で泣いていた。女の大人の声だった。聞こえるのはその犬の悲鳴のような声だけだった。街から音も声も消えていた。

宗男は白い眼をむいていた。

すでに死んでいることはサトにもキヌ子にもわかった。二人は棒のように立ちすくんだ。

「姉ちゃん！ あれ！」とつぜん慎治が空を指さして叫んだ。あおぐと、灰色の雲がグングンこちらへ迫ってきてきつあつた。いや、赤茶色だったかも知れない。砂ボコリだった。雲ではなかった。太陽は、かき消された。あたりは、みるみる、暗くなった。紙干レや木の葉ツバが、ヒラヒラと砂といっしょに降りはじめた。

このとき、はじめて二人は、大浦K町の家々の屋根瓦という屋根瓦が、吹きとばされたり、ズリ落ちかかっているのに気づいた。「竜巻がきたとだろか」サトが言った。やつと、宗男は、その、なにやらわからない風の力で日光浴中の二階の屋根から吹きとばされ、踏み石に頭をたたきつけられて死んだことを二人は理解した。

八月九日午前十一時七分。

その五分前に、大浦の北、約三キロの浦上に原子爆弾の投下されたことはまだ知らない。

長篇『終焉の姉妹』は、このサトとキヌ子の姉妹が主人公だ。

長崎県南高来郡津佐町近辺の山村、つまり島原半島出身の元陸軍下士官憲兵曹長佐藤正吉一八九〇年生、一九七四年病没・トメ（一九〇〇年生、四四年病没夫妻のあいだに生まれた六男三女、正一）二一年生、高等小学校卒業後に八幡の鉄工所に就職、ルソン島で四

五年戦死)・ミチ(二三年生、高等小学校卒業後に奉天の関東軍軍需管理部に就職、消息不明・宗男(二五年生、四五年爆死)・サト(二八年生)

・キヌ子(三〇年生)・満州夫(三二年生、四七年「原爆症」で死去)・

民夫(三五年生、四八年「原爆症」で死去)・戦太郎(三七年生、七八年

病没)・慎治(三九年生、四五年「原爆症」で死去)の兄弟姉妹が、戦

争ともなう「歴史」に翻弄されていく物語だ。概略の一部を紹介

するなら、一九一八年の三井三池万田炭坑ストライキへの出勤時

に遠因する腰痛によって、四〇歳にて小倉憲兵隊を退役した正吉は、

長崎A造船所現在の三菱重工長崎造船所の労務部に「アカ」対策係

として再就職し、「大浦天主堂というヤソの寺の下を東方へ十分ほ

どいった」「大浦K町」に住む。造船所退職後、日中戦争から米英

開戦に至る戦時体制の進展のなかで、長崎市の在郷軍人会事務長

として、長崎憲兵隊と表裏一体で権勢を振るうものの、敗戦によつ

て生活は一転する。「戦争犯罪人」一家として疎まれるなか、まず

キヌ子が、家出先の佐世保の知人宅で、押し入った米兵MP(のちに、

ムットマンという不確かな名前は知る)に強姦され、続いてサトも、家

族の食糧調達に侵入した長崎港の米軍倉庫で米兵に犯され、とも

に一度の暴行で妊娠し、相次いで、それぞれミドリ・正太郎という

混血児を産むこととなる。父親はわからない。一九四六年の夏、

キヌ子は十六歳、サトは十八歳だった。そのあとの二人の軌跡を辿

ることは辛い。正直いって、これでもか、これでもかと不幸が襲い続

ける。なお、弟たちが「原爆症」で亡くなつていくのは、被爆直後

に諫早出張から列車で帰宅予定の父・正吉を長崎駅まで、生き残

つた六人そつて迎えに行つたからだつた。キヌ子は動員先だつた壊

滅したA兵器製作所(三菱兵器)へ救援に行き、残り五人は、浦上駅

を過ぎて道ノ尾駅まで、被災直後の街を線路に沿つて往復している。戦太郎も三十三年後に、「原爆症」らしき症状で急死する。

サトが後に結婚して産んだ子供・貫次郎は「知能に問題があり握力や乳をすう力のないのは長崎ピカドンと関係なしとはしない」と診断される。「原爆の後遺症らしく知恵おくれ」、放射能の影響を、母体を通じて受けているとされる。

ところで、キヌ子の産んだミドリには実在のモデルが存在している。それは、『終焉の姉妹』でも発端と結末で語られる、日本テレビのドキュメンタリー番組「子供たちは七つ海を越えた——サンダース・ホームの一、六〇〇人——」(78・7・12放映、スポンサー三菱各社)に登場する「ヘレン・光子」だった。

三菱財閥の創始者・岩崎弥太郎の孫・沢田美喜が一九四七年二月一日に、大磯の旧岩崎家別荘で開いた混血児の施設「エリザベス・サンダース・ホーム」に取材したこの番組は高く評価され、一九七八年度の芸術祭ドキュメンタリー部門大賞や菊池寛賞などを受賞している。ちなみに、第26回にあたる菊池寛賞は沢田と日本テレビが共同で受賞し、他に木村毅・五味川純平・植村直己が並んでいる。

「ヘレン・光子・フォーステター(旧姓・佐野ヘレン)主婦 イギリス ロンドン(養女縁組)の見出しで、星野敏子が紹介する「ヘレン・光子」は、ホームに「生後七ヶ月で母親に抱かれて入り、十一歳の時に巣立っていった」。番組出演で来日した時に「生みの母からの連絡」が突然あったが、お互いに「会わない」結論を出したという。「日本を発つ日、ヘレンは私たちに一通の手紙を託した。封筒には「To mother」と書かれている。……それは“お母さん、私は

あなたを少しも恨んでいません。私が幸せなことをテレビで見られて良かったと思います。あなたもどうぞ幸せになって下さい……” という意味のことが短く書かれ、最後に日本文字で「光子」のサインがあった。あとで判ったことだが、ホームで呼ばれていた「ヘレン」は、父がつけた名で、母親は「光子」と名付け、そう呼んでいたという。「子供たちは七つの海を越えた——エリザベス・サンダース・ホーム」日本テレビ放送網発売・読売新聞社、79・4）

似た証言は沢田美喜も『母と子の絆』（PHP研究所、80・5）でしている。

ヘレンは一歳をすぎたから、その母につれられて私のもとにきた子であった。母というより、年からいえば若い娘といたいたくらしいな女性だった。……ヘレンは、戸籍もなく名もなく、一年数ヶ月になるまで生まれたそのままになっていたので、佐野光子という名で日本籍に入った。ヘレンという名は、アメリカに去った父がつけた名であった。

私ここで、「ノンフィクション・ドラマ」と称する『終焉の姉妹』のミドリとは若干違った消息について、精査しようとは思わない。いまさら、どれが「真実」か、「事実」は何か、などといった詮索は無用である。人はドラマを生きていく。生かされていく。

それにしても、小説より、現実過程の方が遙かに厳しい。ヘレンは、数学者と芸術家のフィリップ夫妻の養女となつてから、スイス留学など精神的な重荷に耐えきれず、一時期は養母によって精神病院にも入れられていたという。

沢田はさりげなく記す。「ヘレンは、光子と呼ばれることをのぞんだ。ヘレンというのは父が名づけた名で、日本を去つてかえりみ

ぬ人を彼女は思い出したいのだろうか。母のつけた光子という名で呼んでもらいたいという。」

人は、どのような名で呼ばれようとも自己同一性を保つ、といった言辞に私は与しない。日米にまたがる名前に切り裂かれ、またパール・バックを介した養家から、逃げるように英国へ渡つた光子は「二度とアメリカには住みたくない」と断言する。その事情もいだろう。「こうしているのは、本当の自分ではないって思いつけながら、次第に本当の自分が判らなくなつてきたわ。」

ヘレンに欠如していた事柄や、「本当の自分」について論評することはよそう。ただ、個人も共同体(国家・民族も「欠如」を意識した時、それを埋める「かたり」なしには、生きていけない。そこでは、「真実」や「事実」よりも、「本当らしさ」が優先する。居心地よさが要求される。そのように歴史Ⅱ物語は形成され、いったん成立したものは実体として、それなりの妥当性・有効性を保つが、決して永遠不変のものではありえない。そこに、安住できるなら、それもいだろう。

しかしながら、違和感を抱き始めたとき、自らを批判的に、自己否定的に相対化する作業、常に新しく物語を更新していく作業も必要なのだ。そうした契機なしの、のつべらぼうの「主体」だけでは、「世界」と向き合うことはできない。言葉を換えれば、社会的関係も視野に入れながら、既成の物語との差異(居心地の悪さ)を自覚し、自前の物語として編み出していくことである。いかなる神仏やイデオロギーにも頼らずに、「自由」を、いささか文学的に定義づけるとすれば、以上のように言えないだろうか。それは、文字や言葉にするかどうかには関係ない。(読者)もまた、新たな物語

を生きていく。

それにしても、サトとキヌ子の子供たちが、いわゆる「被爆二世」であることに、千田は積極的には触れない。いや、弟たちを「原爆症」で亡くしながら、自らの発病への不安もほとんど語られない。

「混血児」問題の方が、本人たちには大きいのしかかっていたからにしても、長崎原爆を背景とするには、いさかか不満が残る箇所である。

ところで、作者の千田夏光(せんだ・かこう、本名・貞晴、一九二四・八・二八〜二〇〇〇・一一・二二)は、「従軍慰安婦」に関する著述で名高い。父が満鉄の土木技師だったため、関東州大連市で生まれた。日本大学中退後、毎日新聞記者を勤めていた。主著『従軍慰安婦』は正統ともに、初版・双葉社版(73・10〜74・7)から三書房・新書版(78・9)、講談社・文庫版(84・11〜85・12)と版を重ね、流布している。他にも『従軍慰安婦・慶子』(光文社、81・11文庫版、85・8)は、支那事変のさなか、福岡から中国へわたり、百二十四聯隊とともに歩んだ一人の女性だけを追いかけた得難い作品だ。

『終焉の姉妹』は、日本共産党中央機関紙「赤旗」に連載(79・5・16〜80・1・31)された後、新日本出版社から上下二巻で刊行(80・5〜6)された。講談社文庫版(86・8)も上下二巻で出ている。

日刊新聞への連載小説にも関わらず、エンターテイメント性よりも、記録性が優先されているのは、掲載紙を考慮すれば納得の行

く点である。例えば、「八月二十八日、東京郊外厚木基地への第一次進駐にひきつづき、横浜、佐世保など主要都市へ、つきつぎと、すばやく占領部隊をおくりこんでいたのに、広島・長崎へは、急速進駐を見合わせていた。長崎の場合、まず九月二日、長崎港外はるか十キロ地点に病院船「ヘブン号」を派遣、ここで長崎市の被爆状況を望遠鏡でたしかめ、生き残った長崎医大教授数名をよびつけ実情報告をもとめることからはじめていた」という。さらに「九月二十五日、米海兵隊が進駐してきて三日目の夕方ごろから、長崎でも大波止海岸へ食べ物ほしきに肉体をひさぐ女性があらわれ、たまた「大波止付近、駅前では三メートルおきくらいに「ハイ! シュ―シャン」少年達が声をあげていた」と、「パンパンガール」と靴磨少年の光景を伝える。

なお、千田の曾祖父の千田貞暁(一八三六・七・二九〜一九〇八・四・二三)は、薩摩藩出身で、明治初期の広島県令(初代県知事)を勤めた。十年の在任中、道路や港湾建設に多大な足跡を残している。明治国家の「富国強兵」策に則り、軍事都市広島の基礎を築いた人物で、それらの功績によつて男爵・貴族院議員となった。広島赤十字原爆病院の所在地、中区千田町の地名は千田貞暁に由来する。近くの字品港跡地には千田神社(千田廟かちょう)もある。

千田貞暁の曾孫・貞晴、筆名は「夏光」。「夏の光」は、一九四五年八月の「真夏の閃光」に由来するのだろうか。